

プスコフの歴史と文学¹

三浦清美

1. プスコフ征服の物語

〈解説〉

15-16世紀にモスクワ諸公によって遂行された、ロシア国家の中央集権政策は共和政都市プスコフにもおよんだ。1510年、プスコフは最終的に独立を失った。プスコフの民会は廃止され、民会の鐘は外され、モスクワに持ち去られた。この歴史的事件を、モスクワ版の「プスコフ征服の物語」は事務的かつ詳細に記述している。一方、『プスコフ第三年代記』の作者は、モスクワ諸公にたいして敵対的な気分をいだき、ワシーリイ3世の背信行為に憤怒と悲しみをいだき、モスクワ公を反キリストに準えている。

ここに紹介するのは、『プスコフ第一年代記』に収められた「プスコフ征服の物語」である。その作者は、大部分のプスコフ作家たちの作品とは異なり、プスコフのモスクワへの併合の合法性を認め、プスコフを大公のもっとも古い相続領地と認めたとて、プスコフ人たちははるか昔から大公に忠誠を誓ってきたと述べている。それと同時に、過去のものとなったプスコフの自由にたいして哀惜の感情をあらわにしており、そうした箇所では物語からは真実の叙情があふれだす。

翻訳に用いたのは、В.И.オホトニコヴァの刊行テキストである。² オホトニコヴァは、『プスコフ第一年代記』のポゴージン写本（РНБ, собр. Погодина 1404-а. л. 659-664об., 16世紀後半）に拠って、テキストの校訂をおこなった。

¹ 本稿は、『電気通信大学紀要』、『エクフラシス』別冊（早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所）に連載されてきた『中世ロシア文学図書館』の第8集「プスコフの歴史と文学②」として刊行されるものである。本稿には、「プスコフ征服の物語」、長老僧フィロフェイによる「第三のローマ理念」をめぐる書簡「悪い日と悪い時間についての書簡」、「大公ワシーリイへの書簡、十字の切り方の変更とソドムの淫蕩について」の計3篇が収録されている。「プスコフ征服の物語」はВ.И.オホトニコヴァが、フィロフェイの2書簡はВ.В.コーレソフがテキストの校訂と注解をした。以下、注はとくに断りが無い限りおのおのの刊行テキストに拠る。聖書は新共同訳を参照した。

² *Повесть о Псковском взятии (Подготовка текста, перевод и комментарии В.И. Охотниковой)* // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 9. СПб., 2000. С. 222-233, 526-528.

〈翻訳〉

7018年(1510年)、10月26日、聖デメトリオスの記念日、大公ワシーリイ・イワノヴィチ³は自らの相続領地、ヴェリーキイ・ノヴゴロドに、自らの弟、分領公オンドレイ⁴と自らの大貴族とともにやってきた。

プスコフ人たちは、君主にして大公ワシーリイ・イワノヴィチがヴェリーキイ・ノヴゴロドにいと聞くと、自らの使節、市長ユーリイ・エリセヴィチ、市長ミハイル・ポマゾフ、すべての区(コネツ)⁵の大貴族たちをヴェリーキイ・ノヴゴロドに派遣した。プスコフ人たちは、大公ワシーリイ・イワノヴィチに、自分たちの相続領地と、よき意志をもつプスコフの男たちを安堵し、防衛して下さるようにと、150ノヴゴロド・ルーブリ⁶を献上した。いわく、「私どもは、そなたの代官にして我らが公イワン・ミハイロヴィチ・レプニャ⁷とその配下の者たち、近郊の町々の代官たちとその配下の者たちに辱めを受けています」と。

そして、大公は我らの市長たちに答えた。「余は、我らの父や父祖たち、大公たちがそうしてきたように、そなたたちと、みずからの相続領地を安堵し、防衛したいと思っている。わが代官である公、イワン・ミハイロヴィチ・レプニャについてそなたたちが余に語ったこと、そなたたちがこの男について多くの不満を述べたことについては、余はそなたたちのままで彼にその責めを問うことにする。」そして、大公は我らの市長と大貴族たちを下がらせた。

我らの市長たちはプスコフ人たちの民会で、大公が丁重に自分たちの贈り物を受け取ったと述べたが、大公が心の底で思っていることについて、自らの相続領地とプスコフの男たち、プスコフの町に陰謀を企んでいることは、誰も知らなかった。

³ イワン3世とソフィア・パレオロゴスの子で、1505年から1533年までモスクワ大公であった。

⁴ イワン3世の息子のなかでもっとも年少(6番目)で、スタリツァ分領公。

⁵ プスコフは、いくつかの区(コネツ)に分けられていた。

⁶ 多くのロシアの都市は、それぞれが鑄造した貨幣をもっていた。それらは鑄造の方法も価値も異なっていた。13-14世紀、16世紀前半の1ノヴゴロド・ルーブリは、170.1グラムの純銀を含む銀塊であった。

⁷ イワン・ミハイロヴィチ・レプニャ=オボレンスキイ公のこと。イワン3世、ワシーリイ3世統治時代における有名な軍司令官であった。1491年には、オルダのハーンにたいするモスクワ遠征軍の司令官を務め、1496年には、スウェーデンへの遠征で最前線の部隊を指揮した。ルーシ・リトアニア戦争でも軍司令官を務め、カザン遠征にも参加した。1509年から1510年にかけて、プスコフの大公代官であった。プスコフ人たちは、彼を「とんだ災難(ナイジェン)」と呼んだ。なぜなら、彼は「故習」によらず、彼らの同意と承諾なしに赴任したからである。プスコフ人たちは彼を敵意をもって迎え、大公ワシーリイ3世にたいして、レプニャ公は「人々に過酷である」と讒言した。レプニャがプスコフで行なった計画は、大公自身が直接プスコフの事案に干渉するきっかけとなった。

そのあとしばらく時間がたち、冬になると、プスコフから、オボレンスキイ家のプスコフ公イワン・ミハイロヴィチ・レプニャが、君主にして大公にプスコフ人たちを讒訴にいった。プスコフ人たちが彼にしかるべき敬意を欠くというのである。しかし、レプニャは故習にしたがってプスコフに来てプスコフ公位についたのでもなければ、十字架接吻を経てプスコフに居住したのでもなければ、聖三位一体⁸にたいしてもプスコフ人たちにたいしても善をおこなおうとしたのでもなかった。このレプニャは小士族たち、市長たちに多くの悪行を働いたので、小士族たち、市長たちはレプニャ公がどれほどの悪を自分たちに働いたかを思い起こして、彼らはイワン・ミハイロヴィチ・レプニャのことを大公に告訴するにおよんだ。

このとき、プスコフの市長たちはプスコフ人たちとともに、これらのことが功を奏さないと悟り、近郊の町々と郷に書簡を送り、次のように言った。「誰であれもしも誰かが(プスコフ)公にたいして含むところあれば、ヴェリーキイ・ノヴゴロドの君主にして大公のもとにゆき、叩頭して陳情をおこなうがよい。」

この週に、市長レオンチイが市長ユーリイ・コピルのことを訴えに、陳情に行った。ユーリイもこれに応えるためにノヴゴロドに行き、そこで裁判が行われた。市長ユーリイはノヴゴロドからプスコフに自らの文書を送ったが、その書簡のなかには、次のようなことが書いてあった。「もしもプスコフから市長たちがイワン・レプニャのことを訴えに行ったとしても、悪いのはプスコフの国の全体である」と。このとき、プスコフ人の心は萎えた。

この書簡が届いた4日後、9人の市長たちとあらゆる商人組合の長たちがノヴゴロドに赴いた。しかし、大公は何の措置も講じることなく、次のように言うだけであった。「不満をいだいて陳情をおこなう者たちよ、そなたたちは主の洗礼の日までに集合するがよい。余はそのとき断を下すであろう。」大公は、それ以上、何の措置も講じなかった。

同じとき、1月6日、主の洗礼の日、大公はすべての市長たち、同様に、大貴族たち、商人たち、商人組合の長たちに集合して川で水の清めをおこなうように命じた。大公自身もあらゆる大貴族たちを連れてヴォルホフ川に出る一方、司祭たち、輔祭たちも十字架をもって川に出て、その日に主の洗礼の祝日を祝った。ノヴゴロド大主教はそのとき、ノヴゴロドにいなかったもので、水に十字を切ったのは、スモレンスクの主教と司祭たちであった。人々は水の聖別がすむと、聖ソフィアに向った。

大公は自らの貴族たちに自分たちが考えているとおりに、行動するように命じた。そして、我らの市長たちとそのほかの人々に、次のように言った。「プスコフの市長たちよ、

⁸ プスコフの伝統的な聖所、三位一体教会はプスコフの主聖堂である。「聖三位一体」、「聖三位一体の家」といった言い回しは、プスコフの同義語として用いられている。

大貴族たちよ、不満の陳情をする人々よ、君主はそなたたちみなに君主の屋敷にともに集まるように命じた。来ない者がいるなら、その者は君主からの懲罰を恐れるがよい。なぜなら、君主はすべての者たちに断を下そうとしているのだから。」

そして、プスコフの市長たち、貴族たちは一人残らず、水の清め場から大主教の館を指して行った。大貴族たちは市長たちに訊ねた。「そなたたちは全員が集まったのか。」市長たち、大貴族たち、商人たちは屋敷に連れていかれ、若い人々は宿にとどまった。屋敷に通されると、大貴族たちはプスコフの市長たち、大貴族たち、商人たちに言った。「そなたたちは、神と全ルーシ大公、ワシーリイ・イワノヴィチに捕えられたのだ。」そして、プスコフの市長たちは、その妻たちが連れてこられるまで拘束され、若い人々は名前を書き留められたうえで、判決が下されるまで、各々の区のノヴゴロド人たちに預けられ、食事をあたえられた。

プスコフ人たちは、彼らが捕えられたという知らせを、プスコフの商人フィリップ・ポポヴィチから受け取った。フィリップはノヴゴロドに行き、ヴェリャジャ川⁹の近くにとどまっていたのだが、この悪い知らせを聞き、商品をそのまま打ちやりプスコフに駆けつけ、プスコフ人たちに大公が自分たちの市長たち、大貴族たち、訴人たちを捕えたことを伝えた。彼らに恐怖と震撼が襲った。唇が悲しみのためにからからに乾いた。ドイツ人が何度もプスコフに攻め寄せたが、このような災厄や不幸はなかった。

民会が開かれ、君主に事を構えるか否か、町に籠城するか否かを考えはじめた。しかしながら、君主に手をあげることはできないという十字架接吻を思い出し、また、市長たち、大貴族たち、身分の高い者たちがみな、いま君主のもとにいることにも思いをいたした。プスコフ人たちは大公のもとに急使、百人長エウスタフイイを派遣し、老いも若きも涙にくれながら大公に請願した。いわく、「汝、君主にして我らが大公、ワシーリイ・イワノヴィチよ、汝のいにしえからの相続領地を憐れみたまえ。」しかし、大公には自らの思惑があった。この思惑ゆえに、モスクワからヴェリーキイ・ノヴゴロドに來たのだったが、プスコフを自らの体制に組み込むことをもくろんでいた。

大公は自らの書記トレチャク・ドルマトフ¹⁰を派遣すると、プスコフ人たちは君主から故習の安堵が出るものと期待して喜んだ。トレチャクが民会で大公の要求を告げたが、そのもっとも重要なものは以下のとおりであった。いわく、「君主からの叩頭。余の相続領地

⁹ イリメニ湖から西に流れ出る支流。

¹⁰ ワシーリイ・トレチャク・ドルマトフは、イワン3世、ワシーリイ3世の特段の信頼を勝ち得ていた。1480年のタタールの攻撃のさい、彼は大公の国庫を守り、トヴェーリの住人にイワン3世への忠誠を誓約させた。リトアニアとデンマークで使節の任を果たし、一連の法律の起案に参画した。プスコフにたいして自らの要求を突きつけ民会の鐘を持ち去る任務を、ワシーリイ3世がこの経験豊かな外交官にして政治家に託したことは偶然ではない。

よ、プスコフの市長とプスコフ人よ、もしもそなたたちが故習のとおり暮らしたいと思うならば、そなたは余の二つの意志を満たさなくてはならない。

一つ目は、民会を廃止することである。民会の鐘は外して運び去らなければならない。二つ目は、プスコフに二人の代官を、近郊の町々に代官を一人ずつ置くことである。さすれば、そなたたちは故習のとおり暮らすことができる。このたった二つの君主の意志を満たさず、それらを遂行しないならば、神が君主の心にあたえたことが実現するであろう。君主のもとには、十分な兵力が準備万端整えられている。君主の意志にしたがわぬ者には、流血の事態が生じるであろう。君主にして大公は、プスコフの聖三位一体に叩頭する。」トレチャクはこれを言い終えると、段に座った。

プスコフ人たちは地に額づき、彼にたいして返答することができなかった。あたかも母の胸に乳があふれるように、彼らの目には涙があふれた。涙を流さない者は、知恵が足らず幼くて物心がついていない者だけだった。彼らはこう答えるのが精いっぱいだった。「君主の使節よ、神が翌日に答えを出さしむるであろう。そなたに何と答えるか、我らに内輪で考えさせてほしい。」そして、プスコフ人たちはひどく泣いた。涙とともに瞳をも流してしまうほどだった。心臓が胸から剥がれ落ちてしまうほどだった。

翌朝、日曜日の日が明けて民会の鐘が鳴り、トレチャクが民会に入ってきた。プスコフの市長たちとプスコフ人たちは、次のように話しはじめた。いわく、「我々の年代記には、曾祖父たちも、祖父たちも、父たちも大公と十字架接吻し、我らプスコフ人は、誰であろうとモスクワの大公のもとを離れて、リトアニアにもドイツにもつかないと誓い、我らはそのよき意志のなかで故習を守って暮らしている。我らプスコフ人が大公を離れ、リトアニアなりドイツなりに走り、君主なしで生きようとしたときには、我らに神の憤怒が下り、飢餓、火災、洪水、異教徒の襲来に見舞われるであろう。一方で、我らが君主にして大公がわが身にたいし十字架接吻の約束を果たそうとしないならば、我らが故習を守らないときに我らを襲うのと同じ災厄が、君主にして大公を襲うであろう。

いまや、神と我らが君主は自らの相続領地において、プスコフの町において、我らと我らの鐘にたいして何をなされても自由である。我らは自らのかつての十字架接吻を守り、誓約に背いて流血の事態を招くことを良しとしない。我らは自らの君主に手をあげ、町に立てこもるようなことはしたくない。また、我らが君主にして大公は、生の源なる聖三位一体に祈りを捧げ奉り、自らの相続領地、プスコフに滞留することを欲している。我らは自らの君主に心のすべてを傾けて、我らを最後まで滅亡させぬように願ひ奉る。」

1月13日、聖なる殉教者、エルモライとストラトニクの日、命の源なる聖三位一体の民会の鐘を取り外した。プスコフ人たちは、鐘を見て自らの故習と自らの自由を思って泣いた。それから、鐘はスニェトゴラ修道院の所有地にある神学者ヨハネ教会に運ばれた。その場所は、今は代官の屋敷となっている。トレチャクは民会の鐘をノヴゴロドの大公のもと

とに運んだ。¹¹

そして、同じ月、大公の行幸の一週間前に、大公の軍司令官たち、大ピョートル公、イワン・ワシーリエヴィチ・ハバル、イワン・アンドレーヴィチ・チェリャドニンが兵を率いてやってきて、¹² プスコフ人たちに十字架接吻させ、市長たちに大公は金曜日に来ると告げた。プスコフの市長、大貴族たち、市長の吏員、商人たちがドゥブロヴノ¹³ まで君主にして大公を迎えに出た。

1月24日、聖なる我らが母アレクシーニヤの記念日の木曜日、我らが君主にして全ルーシの大公ワシーリイ・イワノヴィチはプスコフに到着した。この日、コロムナ大主教、ヴァシアン・クリヴォイ¹⁴ が朝早く到着していて、修道司祭たち、司祭たち、輔祭たちがポーレの聖画像教会¹⁵ で大公を出迎えようと考えていた。しかしながら、大主教は、大公が遠くまできて自分のことを出迎えてはならぬと命じたと言った。プスコフ人たちは、大公を3ヴェルスタのところで出迎えた。プスコフ人たちは自らの君主に叩頭し、君主は彼らの健康を祝した。プスコフ人たちは言った。「汝、我らが君主にして大公よ、全ルーシのツァーリよ、健勝にてあれ。」

大公はプスコフに向った。大公を彼とともに来た主教、修道司祭たち、司祭たち、輔祭たちが、現在広場となっているトルグ¹⁶ で出迎えた。大公自身は馬から降り、仁慈かぎりなき救世主聖堂に向った。そこで主教が大公を祝福し、大公は命の源なる聖なる三位一体教会に行った。彼らは感謝祈禱を歌って、大きな声で君主の弥栄（いやさか）を祈った。主教は彼を祝福していわく、「君主よ、神はプスコフを征服したそなたを祝福する。」教会にいたプスコフ人たちはそれを聞き、ひどく泣いた。いわく、「神と君主のご意志だ。我ら

¹¹ プスコフの民会の鐘は、三位一体聖堂の鐘楼に懸っていた。鐘は取り去られたあと、クレムリからスニェトゴラ修道院の所有地に運ばれた。

¹² プスコフにおける大公の政策を推進したのは、レプニヤ、ドルマトフら、大公ワシーリイにごく近い大貴族にして軍司令官たちであった。ここに登場する、イワン・アンドレーヴィチ・チェリャジン、イワン・ワシーリエヴィチ・オブラツォフ・ハバル＝シムスコイはいずれも、1507-1508年、1512-1522年のルーシ・リトアニア戦争の軍司令官を務め、クリミア・タタール、カザン・タタールへの遠征にも参加し、ルーシの使節ともなった。ピョートル・ワシーリエヴィチ・シェストゥノフは、宮廷で大公の大膳職を務めていた。

¹³ ポルホフから24ヴェルスタのところにある村。ノヴゴロド領とプスコフ領の境界、ノヴゴロドからプスコフに向かう街道の途中にあった。

¹⁴ 1510年、コロムナ主教はミトロファンであった。モスクワとルーシのほかの史料は、ワシーリイ3世に随行した主教の名前を正確に伝えている。

¹⁵ ポーレの人の手にならぬ救世主修道院は、プスコフの南およそ3キロのところにある。

¹⁶ 商業地区の呼称。プスコフの古いトルグは、ドヴモントの壁の向こう側、旧市街にあったが、このトルグは新しい場所に移されると、もとの場所は広場となった。

はいにしえより大公の相続領地だった。大公の父たちの、祖父たちの、曾祖父たちの相続領地だったのだ。」

日曜日に、大公はプスコフ人たち、プスコフにかつての市長たち、市長の吏員たち、大貴族たち、商人たち、地主たちに命じた。「余は、そなたたちに余からの憐れみを賜ろう。」老いも若きもプスコフ人たちは、大公のいる屋敷に出かけた。市長たちと大貴族たちは裁きの間に行き、ピョートル・ワシーリエヴィチ公は玄関に立ち、リストにもとづいてプスコフのほかの大貴族と商人たちの名を大きな声で呼びはじめた。これらの人々には見張りがつけられた。庭にいたプスコフの若い人々には次のような答えがあった。「そなたたちに大公は用はない。大公が用のある者たちは、大公が自分のもとに呼び寄せている。君主はありがたくも、そなたたちにこれからの身の振り方を述べた文書を賜るであろう。」

裁きの間にいた者たちは監視がつけられ、見張りのもとでそれぞれの邸宅に行き、その夜のうちに妻、子、かんたんな身の回りの物とともにモスクワに送られた。すべてを捨てて時を移さず啼泣と慟哭とともに出立した。ノヴゴロドで幽閉されていた者たちの妻も行った。すべてでプスコフの 300 家族が捕えられたのである。

かくして、このときプスコフの栄光が露と消えた。

町々のなかで最も栄えある偉大なるプスコフよ。なにゆえに嘆くか。なにゆえに泣くか。プスコフの町はこう答えた。「どうして私が嘆かぬことがあろうか。どうして私が泣かぬわけがあろうか。たくさんの翼をもち、翼にたくさんの爪を隠した鷲が、私のもとに飛び来たってレバノン杉の梢を切り取る。¹⁷ 我らの罪ゆえに神は罰を下し、我らの土地を荒野にする。我らの町は荒廃し、我らの民は虜囚となり、我らの市は根こそぎ倒され、また別の市は馬糞のしたで蹂躪される。我らの父たちと兄弟たちは離散させられる。我らの父たち、祖父たち、曾祖父たちがいなかったところに、父たち、我らの兄弟たち、我らの友人たちが連れ去られ、我らの母たち、姉妹たちは凌辱にまかされる。町のほかの者たちは剃髪して修道士となり、修道士の妻たちもほかの町の捕虜となることを望まずに、自らの町から修道院に行く。」¹⁸

兄弟たちよ、いまや見るがよい。こうしたことを知り、我らはこの恐ろしい罰を恐れ、自らの主のまえに膝まづいて自らの罪を悔悛し、主の憤怒がさらに深くならぬように、これ以上厳しい罰をおのれに課さないようにと祈る。さらに主は、我らの悔悛と悔い改めを待たれている。我らは悔い改めなかった。より大きな罪を犯していった。民会では、邪悪でずる賢い中傷をおこない、大声で怒鳴り合い、舌が何を言うかを頭がわからないまま、自らの家を正しそれに秩序をもたらすことができなかった。

¹⁷ 『エゼキエル書』17章3節。

¹⁸ この部分は、ウラジーミルのセラピオンの説教に似ている。

そして、このあと大公は、移住させられたプスコフ人の村々を大貴族たちに下賜しはじめ、プスコフには代官、グリゴリー・フョドロヴィチ・チェリャジン、イワン・オンドレヴィチ・チェリャジンが置かれた。ほかの書記として、ミシューリ・ムノヒン、オンドレイ・ヴォロサトウイが任命され、12人の市役人、12人のモスクワ出身の執事長、12人のプスコフ出身の執事長が選ばれ、彼らに村があたえられた。彼らは裁判のさいに代官と判事とともに同席し、正義を守るように命じられた。

代官のもとでも、判事のもとでも、大公の書記のもとでも、彼らの正義、十字架接吻は空に飛び去ってしまい、彼らのあいだで不正義が横行しはじめた。彼らはプスコフ人たちにたいして過酷であり、貧しいプスコフ人たちは、モスクワの裁きを知らなかった。大公は、プスコフ人たちに自らの下賜状をあたえた。大公は自らの代官たちを周辺都市にも派遣し、周辺都市の住民たちが十字架接吻をするように命じた。プスコフ領内の町々で、代官たちが住民を圧迫しはじめた。

大公はモスクワにピョートル・ヤコヴレヴィチ・ザハリンを派遣し、全モスクワにたいして大公がプスコフを征服したことを祝った。モスクワからプスコフに身分の高い者たち、商人たちが送られ、あらたに税制を定めた。なぜなら、プスコフにはそのような課税がなかったからである。モスクワから国家の銃兵と衛兵が送られた。新しいトルグを建てる土地が、堀を超えたルガ門の向かい、ユシカ・ノソヒンの菜園と市長グリゴリー・コロトフの果樹園があった場所にあたえられた。大公はエルモルカ・フレブニコフの果樹園のプスタヤ通りに聖オクシニア教会を建立したが、それはオクシニアの記念日にプスコフが彼の手に落ちたからである。この通りがプスタヤ（空の）と名付けられたのは、菜園のあいだにあって屋敷に面していなかったからである。大公は4週間プスコフに滞留し、斎戒期の第二週の月曜日にプスコフを立った。自らもう一つの鐘を持ち去り、小士族1000人とノヴゴロドの銃兵500人を残した。

代官たちはプスコフ人たちにたいして強権を行使しはじめた。執達吏たちは一つの保証業務にたいして、10ルーブリ、7ルーブリ、5ルーブリ取った。もしもプスコフ人の誰かが大公の文書にはこれこれの額の手数料が定められていると訴えたと、その者は殺された。いわく、「見よ、奴隷よ、これが大公の文書である。」代官たち、判事たち、そのほかの者たちは、プスコフ人の生き血をたらふく飲んだ。プスコフには外国人たちが住んでいたが、自らの国へと四散した。なぜなら、もはやプスコフには住むことができなかったからである。プスコフ人たちだけが残った。まさに地は裂けることがなく、高く舞い上がることもできないからである。

2. 「第三のローマ理念」をめぐる長老僧フィロフェイの書簡

〈解説〉

フィロフェイにかんする伝記的な情報はきわめて少ないが、16世紀前半、プスコフ・エレザル修道院の修道士であったことが知られている。その著作のなかで述べられた「モスクワは第三のローマである」という理念は、それ以降の時代のロシアの社会・政治評論と歴史哲学のなかで中心的な命題の一つになった。

フィロフェイの主な著作は、プスコフの書記、ミハイル・グリゴリエヴィチ・ミシューリ＝ムネヒンに宛てた書簡である。ムネヒンは経験豊かな行政官、卓越した政治家、文筆家で、ワシーリイ3世に信用されていた。1510年にプスコフで書記の職務につき、プスコフ人たちの信頼を勝ち得た。フィロフェイがムネヒンに書簡を書いたのは、以下の事情による。

有名な論客、翻訳者、ワシーリイ3世づきの侍医であったリューベク人、ニコライ・ブレフは、1522年ころシュトッファーの『占星術年鑑』を翻訳した。このなかで1524年に大洪水が起こるといふ予言があった。その翻訳がミシューリ＝ムネヒンの手にわたり、ムネヒンは長老僧フィロフェイに内容を照会した。フィロフェイは、星が魂をもたぬ存在である以上、人間や民族の運命に影響をあたえることはありえないと断じ、変化は神のご意志によって起こると言明した。

翻訳に用いたのは、B.B.コーレソフによる刊行テキストである。¹⁹ コーレソフは、『悪い日と悪い時間についての書簡』を16世紀の写本（РНБ, Q. XVII. 15, л. 493-497об.）に、また、『大公ワシーリイへの書簡』は17世紀の写本（РНБ, собр. Погодина, 1620, л. 223-227）にもとづいてテキストの校訂をおこなった。

〈翻訳〉

2-1. 悪い日と悪い時間についての書簡

君主にして大公の書記、ミハイル・グリゴリエヴィチに、そなたの神への貧しき祈り手、長老フィロフェイが神に祈りを奉げ、叩頭申しあげます。

わが君主よ、そなたは私に文書を送達し、そのなかで、私とその書簡のなかに含まれた著作を解釈するべき旨が書かれております。わが君主よ、そなたには、私めが田舎生まれ

¹⁹ Послания старца Филофея (Подготовка текста, перевод и комментарии В.В. Колесова) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 9. СПб., 2000. С. 290-304, 538-542.

で、アルファベットを学んだだけであり、異教的な知識に興味をもたず、占星術師たちのふるう弁舌に耳を貸さず、賢き哲学者とも談論を交えず、ただひたすら恵み深き聖書のみを学んだことをご存知です。もしも罪深き私の魂が罪から清められましたならば、そのことがありませんよう、私は恵み深き神、われらが主、イエス・キリスト、いと清らかなる神の御母、神のお気に入りすべての聖者たちに渾身の祈りを奉げ、永遠の業苦から私を救いたまうようお願い奉ります。

そなたが年の数についてお書きになったことは、モーセによって書かれた『創世記』のことですが、『六日実録（シェスチドゥネフ）』は世界の創造について書かれた、その最初の5日を除く年代記にあたり、最初の人間、アダムからはじまって現在にいたるまでのことが書かれています。ラテン人たちは、過ぎ去ったこれらの年月を飛ばして、キリストの誕生から年を数えはじめています。しかしながら、前者の数え方と後者の数え方には、実際には差異はありません。それが、使徒がこう述べていることからわかります。「最初の人間は土くれからできていたが、二番目の人間は天から降り立った主であった。」²⁰

哲学者たちの頭を悩ませたのは、じつは年の数え方が二通りあったことに拠るのです。つまり、太陽にもとづく数え方と月にもとづく数え方です。太陽による数え方は一年に365日を含み、月による数え方は一年に354日を含んでおります。このために、太陽にもとづく数え方の一年は月による数え方のそれよりも11日多いのですが、この勘定からは太陽と月の蝕がいつあるかは割り出すことはできません。このことをもっと詳細に検討したいならば、『六翼（シェストクルイル）』²¹ にしたがって時間数にいたるまで検討することが必要で、そうすれば何時に月と太陽の蝕が起こるかを発見することができるのです。とはいうものの、この作業は手間ばかり多くて得られるものはごくわずかです。

動く星々について、洪水の徴がある、すべての宇宙の町々、王国、国々、この地上に生きとし生ける者すべてに終末が訪れると書いた者がありますが、神の『聖書』にはこのことについて「あなたのご自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる」と明瞭に語られています。原初に帰るのです。なぜなら、あのお方は父とロゴスに等しく、星に由来するものではないからです。

黄道帯の十二星座と七つの惑星は、触ることができるものでもないし、生きているものでもありません。それは非物質的な炎にほかなりません。それは最初の日に、「光あれ」²²と言われた神によって創造されたものです。その光は火にほかなりません。神が光と闇を分けようとなさったときに、この火には隠れるように命令なさったのです。そのとき、闇

²⁰ 『コリントの信徒への手紙1』15章45節参照。

²¹ 月の満ち欠けと蝕の一覧表を含む天文学の書。ルーシでは、ちょうどこの時代に現われた。

²² 『創世記』1章3節。

だけがありました。神は光と闇を分けました。神は光を昼と、闇を夜と名づけました。²³ 夜とは、光が取り去られた状態にほかならないのです。二日目に神は天をおつくりになりました。三日目に陸、海、樹木、草、種をお造りになりました。水の半分は天に昇らせました。このために、星をお造りになりたいと思ったとき、四日目に光と名づけたこの火から、二つの大きな天体をお造りになりました。昼を照らす大きいほうの天体が太陽で、夜を照らす小さいほうの天体が月と星々です。業の巧みな職人が一方では金の器をつくり、他方ではコインを造るようなものです。

それから、太陽と月の通り道にある黄道帯と名づける十二の星座の名を定めました。太陽は黄道帯の一つの部分で 30 日と 3 時間かけて動き、そのあと黄道帯の次の部分に移ります。このように黄道帯の十二の区分を一つずつ動きながら一年をかたちづくります。月が満月になるには、およそ 15 日がかかります。なぜなら、月が一日で満月になってしまったら、両方の天体によいことが起こらないからです。蝕があまりにも多くおこることになります。月は黄道帯の一区分を 29 日と半日と半時間プラス 5 分の 1 時間かけて動きます。

七つの惑星とか、十二の黄道帯とか、そのほかの星々とか、悪い時とか、ある星座のどこに人間が生まれるとか、運命を決める悪い時に生まれついたとか、よい時に生まれついたとか、裕福になるとか貧乏になるとか、長寿を授かるとか若死にするとか、こういうことはすべて罰当たりなことであり、作り話なのです。最初は、カルデア人²⁴ がこういうことを書きました。彼らは自分のむなしい頭の良さを誇り、高い塔を建てて、星までの高きに届かそうとしました。神は彼らのとんでもない企てを見て、その目論見をうち砕き、出来上がったものを破壊し、彼らの書いたものを退けました。彼らから、ギリシア人がその記録を受け継ぎ、惑星と星々を神と名づけ、万物を創造した神から離れ、神によって造られたものを崇拜しました。彼らについて予言者ダビデは言っています。「神を知らぬ者は心に言う。『神などないと。』彼らは腐敗している。忌むべき行いをする。」²⁵

ギリシア人のあとに、異端者がこれを受け入れ、正教キリスト教信仰という小麦畑のなかに、あくどい毒麦の種をまき、悪い日や悪い時を信じる知能の足りない者たちを嬉しがらせ、彼らは、それは真実であると考えて懺悔をしようとしなくなりました。彼らは恐ろしい最後の審判の日に報いを受け、光を闇に変え、真実を虚偽に変えたかどで異端者とともに裁かれるであります。もしも悪い日や悪い時を神が造られたなら、どうして神は罪深き者をお苦しめになるのでしょうか。そうであれば、悪い人間を生み出したために、神ご自身が悪いということになってしまうでしょう。

²³ 『創世記』1章4-5節。

²⁴ バビロニア人のこと。作者フィロフェイは「バベルの塔」のエピソードを念頭に置いている。

²⁵ 『詩篇』14篇1節。

誠実なる人間よ、ツァーリからツァーリの息子が、公から公の息子が生まれると知るがよい。父祖の栄えと誉れに何かの不足がなければ、その者は土を耕す者にはならないし、ツァーリの娘が土を耕す者に嫁ぐことはないし、地を耕す者の側でも、そういう娘を自分の息子の嫁にとりません。すべてのことは、すべてを見そなわす神の、人知のおよびがたい運命によっておこるのです。

星や太陽や月の動きについては、星自身が動いているわけではないことを陛下はお知りになるがよいでしょう。それは触ることもできないし、命も持っていないし、何ものも見ることはできないのです（なぜなら、非物質的な火は何ものも見ないし、何も知らないからです）。そうしたことは、天使の人知のおよばない力によって行われるのです。このことがよくわかっていたのは、神によって選ばれた器、使徒パウロです。パウロは第三の天に引き上げられ、星々の只なかにあつて、そのなかでこれらの天使の諸力が、人間のために絶え間なく働きかけているのを見たのです。²⁶

ある者は太陽を動かし、ある者は月やほかの星々を動かし、ある者は大気のなかで風を起こし、雲を湧かせ、雷鳴をとどろかせ、地面から水をもちあげて雲とし、天使たちは地面を潤して穀物を実らせ、春、夏、秋、冬と季節をめぐらせませす。このために主は、天使たちが倦まずたゆまず人間のために務めを果たしてくださいと、それは絶え間なく勤勉に人間を救済するために人間を教え、説教をするためであることを、この使徒にお示しになったのです。

使徒はそこで得も言われぬ幻視を見て、書簡のなかでこう述べているのです。「天使たちはみな、奉仕する霊であつて、救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために、遣わされたのではなかったですか？」²⁷ また、別の場所でふたたび次のように言っています。「被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由に与えられるからです。」²⁸ 親愛なる方よ、天使を被造物と呼び、人間を神の御子と呼ぶことを理解なさっているのでしょうか。天使を解放することは、最後の日に彼らの務めが終わることだとお判りでしょうか。

諸帝国や諸国が滅ぶのは、星々のためではなく、万物をお与えになった神によるものなのです。このことについて、預言者イザヤはこう言っています。「おまえたちが進んでしたがるなら、大地の実りを食べるができる。かたくなに背くなら、剣の餌食になる。主の口はこう宣言される。」また、ふたたび使徒たちはこう訊ねました。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか。」イエスは言いました。「父がご

²⁶ 『コリントの信徒への手紙2』12章2-4節参照。

²⁷ 『ヘブライ人への手紙』1章14節。

²⁸ 『ローマの信徒への手紙』8章21節。

自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなた方の知るところではない。」²⁹

主のために、お知りになってください。いまや異教徒たちに蹂躪されているキリスト教の諸帝国は、どんな星と結びついているのですか。預言者はこう言われています。「略奪する者にイスラエルをわたしたのは誰か。それは主ではないか。この方に我らも罪を犯した。」

90年間、ギリシアの帝国は滅びたままで復興されませんでした。³⁰ こうしたことはすべて、我らの罪ゆえに起こったのです。なぜなら、彼らは正教の誉れ高きギリシアの教えをラテン人に譲りわたしてしまったからです。神に選ばれたる者よ、ラテン人たちが、「われらのローマ帝国は不滅である。たとえ、我らが間違った信仰をもっていたとしても。主が我らのことをかまってくださらなかったとしても」と言ったとしても、そなたは驚いてはなりません。彼らがどんなうまいことを言ったとしても耳を傾けてはなりません。彼らは真実に異端の徒なのですから。

彼らは自分の意志で、ことに種無しパンの勤行ゆえに、正教キリスト教信仰から脱落したのです。彼らは我らとともに770年間一緒にいました。それから、735年まえに正しい信仰から外れ、カール帝と教皇フォルモスに唆されて、彼らはアポリナリウス³¹ 異端に陥りました。³² 彼らは種無しパンが清らかであり、情欲がないと主張していますが、自らのうちに悪魔を隠して嘘をついています。アポリナリウスは自らの虚偽の教えで種無しパンで勤行をおこなうように命じています。なぜなら、彼らの言い分では、我らの主イエス・キリストはいと清らかなる処女によって人間の肉体を得たのではなく、天に召される予定の肉体をもって、管をとおるように、処女の子宮をとおって生まれ落ちたのであり、人間の魂を得ることはなく、魂のかわりに自らのなかに聖霊を宿しているのであって、そのことで悪意をもたぬ動揺しやすい魂をだましていくというのです。

嗚呼、これこそ苦々しい虚偽であり、生きたる神からの脱落にほかなりません。なぜなら、もしも救世主が人間の肉体をとらなかつたならば、墮罪したアダムと彼から生まれたすべての人間は神を宿すことはなかつたでしょう。主が人間の魂をもたないなら、今ごろ人々の魂は地獄の深みから救い出されていないでしょう。

²⁹ 『使徒言行録』1章6-7節。

³⁰ 大部分の研究者たちは、フィロフェイが教会合同を決めたフェラーラ・フィレンツェ公会議(1437-39)を念頭に置いたと考えている。

³¹ 310年ころ生まれ、380年以降に没する。その教説においては、フィロフェイが正しく指摘したように、キリストの本質のなかで人性を矮小化しているが、種無しパンについての言及はない。

³² 770と735を足すと1505となるから、書簡執筆の時期は1505年であると考えられる。

誰がこれほどの虚偽と墮落に震え戦慄（わなな）かないことがありますでしょうか。誰がこれほどの虚偽と墮落を嘆き悲しまないことがありますでしょうか。それは、自らの無知の傲慢のなかで異端の教説にしたがい、神を殺したユダヤ人の群集のあとについて、福音書作者が次のように言う人々の共謀者となったのです。すなわち、「総督の兵士たちは彼に嘲笑を浴びせ、そのまえに膝まづき、こう言った。『ユダヤ人の王、万歳』」³³と。

総督の兵士とは、ピラトの奉公人です。しかし、ピラトはローマ人で、ローマ国のポントス³⁴の出身だったので、今にいたるまで祈りをあげるときには、ラテン人たちは頭を下げず、軽く膝を曲げるだけなのです。この人々について、ダビデは聖霊によってすべてを見通し、イエス・キリストが言ったかのように次のように言っています。「あなたは私を無知な者の嘲りに委ねた。」真実に、人間とは無知で、賢くない者です。なぜなら、偉大なるローマの城壁、塔、三層の建物は征服されませんでした。彼らの魂は種無しパンのために悪魔に囚われていたからです。というのは、ハガルの末裔³⁵はギリシア帝国を滅ぼしましたが、その信仰を害すことはしなかったし、ギリシア人たちを信仰から引き離すこともしませんでした。しかしながら、ローマ帝国は破壊されがたかったのです。なぜなら、主はローマ帝国の戸籍に登録されていたのですから。³⁶

我らのキリストの秘蹟は、聖なる聖体礼儀についてこのように述べています。弟子たちがイエスのもとに来てこう言った。「主よ、我らがあなたのために過越の祭の準備をする場所は、どこをお望みですか。」イエスは彼らにこう答えました。「都に入ると、水がめを運んでいる男に会う。その人のあとをついて行き、家の主人にこう言いなさい。『先生が、あなたのところで自分の弟子たちとともに過越の祭を行おうとしています。』」³⁷家の主人は、福音書作者ヨハネの父、ゼベダイでした。

イエスはこの者に二つのパスハ³⁸の食事の準備をするように命じました。一つは、モーセの律法の習慣にしたがって種無しパンを、もう一つはひそかに酵母入りのパンを準備させたのです。このゆえに、秘密の晩餐という呼称があるのです。なぜなら、ユダヤ人のも

³³ 『マタイによる福音書』27章29節。

³⁴ ローマ帝国の黒海南岸地域の呼称。史実としては、ポンティス・ピラトはこの地域と関係をもたない。

³⁵ アブラハムの第二夫人ハガルの子孫のこと。イシュマエルの末裔ともいう。キリスト教文献では、ムスリムを指す。

³⁶ 聖家族がこのためにベツレヘムに向った人口調査のことが念頭に置かれているのであろう。人口調査はローマ帝国の領内でローマ法に基づいて行われた。

³⁷ 『ルカによる福音書』22章9-11節。

³⁸ ユダヤ教で「過越の祭」、キリスト教では「復活祭」を指す。

とには 11 の刻から 14 の刻のあいだに家に酵母入りのパンを置かないことになっているからです。³⁹

まずはじめに彼らは、律法にしたがって慣習どおりにパスハの食事をしました。帯を締めて立ち、杖に身を託しながら、頭に被り物を載せて、種無しパンとからしの入った子羊の肉を食べたのです。食べ終わったあと、腰を下ろして、弟子たちに教えをあたえ、権威を振りかざすことなく彼らを教え導き、そのあと裏切りがあることに触れ、そのあとに洗い桶に水を注ぎ、弟子たちの足を洗い、聖なる洗礼の手本をあたえました。そのあと、ふたたび横になり、パンと葡萄酒だけをならべるようにお命じになり、自らの神の目を天に向けて悲しい言葉を述べられました。

「父よ、時が来ました。自らの息子を称えてください。あなたの息子は、肉に負けない力をあなたが息子におあたえになったがゆえに、また、あなたが息子におあたえになったすべてのことゆえに、あなたのことを称えています。私は彼らに永遠の命をあたえるでしょう。あなたこそが唯一の真なる神であること、あなたが遣わされたのがイエス・キリストにはほかならないことのなかにこそ、永遠の生があるのです。私はこの地上で存分にあなたを称え、事を成し遂げました。ですので、今度は、父よ、世界が造られるまで私が御許でもっていた誉れで、私を称えてください。」

そして、ふたたび弟子たちに言いました。「私は葡萄園で、おまえたちはその枝である。私のなかに生きる者のなかに私はいる。」すると、ふたたび自らの目線をあげてこう言いました。「父よ、あなたの名前において彼らを聖なる者としてください。なぜなら、これらの者たちが正しく聖なる者となるために、私自身が聖なる者となったからです。ですが、私はこれらの者たちのためだけに祈るものではありません。私についての彼らの言葉を信じる者たちのためにも祈ります。父よ、私があなたのなかにいて、あなたが私のなかにいるのと同じように、すべての者たちが一つになりますように。これらの者たちが私のなかにありますように。」⁴⁰

このことは二通りに理解するがよろしいでしょう。主がこれらの者たちのために祈りを捧げるときには、彼らを聖なる秘蹟で教え導いているのであり、聖なる食卓で位の高い聖職者やふつうの聖職者がどうふるまうべきかを教えるようとしているのです。儀礼の式次第があるところでは、聖職者がどうふるまうかを教える必要があるのです。

そうした場で主は、聖なるいと清らかなる自らの手にパンをとり、それをうえに持ち上げ、父なる神に示して感謝を捧げてから、パンを割き、聖なる自らの弟子たちと使徒たち

³⁹ ニサン月の日々のことを指している。ユダヤ人のあいだでマツァ（種無しパン）が用いられるのは、パスハの前日であるニサン 14 日からであり、パスハ後も七日間種無しパンを食す。

⁴⁰ 『ヨハネによる福音書』17 章。

にあたえて、こう仰せられたのです。「手に取り、食すがよい。これはおまえたちのために割かれ、多くの者から罪を拭い去った私の身体である。」弟子たちが食したあと、主は葡萄の実の杯、すなわち、葡萄酒の盃を手に取り、ぬるま湯で割って弟子たちにあたえて言ったのです。「この杯を飲み干すがよい。これは新しい契約の私の血である。おまえたちのために私が注ぐこの杯は、多くの人々から罪を拭い去るであろう。」

主は弟子たちにあたえただけではなく、自分自身も彼らとともに食し、彼らとともに飲んだのです。そのあと、主はふたたびこう言われました。「受難を被るまえに、おまえたちとともにこの過越の食事をしたいと、私は切に願っていた。いまこのときから、私は葡萄の実から飲むこともしない。ふたたびおまえたちと葡萄酒を飲むのは、我が父の王国である。」⁴¹ そして、このあと、「一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山に出かけた」のです。⁴²

キリストを愛する者よ、そなたは、聖別の秘蹟がどうあるべきか、神の聖体礼儀がどうはじまったのかをごらんになりました。イエスご自身が弟子たちを聖なる者とし、聖職者がどのようにふるまえばよいかをお教えになったのです。大切な方よ、水で割った葡萄酒をどう飲み干すかをごらんください。主は、十字架にかけられ、血と水という二つの泉を、自らの神の肉体から滴らせました。主のために、これをお飲みください。自らの30年の人生のなかで、救世主は毎年、旧約の過越の食事を食しましたが、一度として「私は切に過越の食事をしたいと願っていた」とは仰せになりませんでした。この新しい恩寵の密かなる夕べにそうおっしゃっただけです。そのとき、主は我らの救済を確かなものとなさったのです。

かくしてこれらすべてのことについての説教を締めくくるにあたり、光に満ちあふれた眩しき君主の栄えある帝国について一言触れることにいたしましょう。この君主は、天のもとでキリスト教徒にとっては唯一のツァーリなのであり、聖なる神の玉座と宇宙の聖なる使徒教会の統括者なのです。この教会は、ローマとコンスタンティノーブルに代わり神に救済される町モスクワに起こった、いと清らかなる神の御母の聖なる栄えある就寝の教会にほかならず、たった一つこの宇宙にあって太陽よりも美しく輝いているのです。

神を愛し、キリストを愛する者よ、そなたは知るがよいでしょう。すべてのキリスト教帝国は終末にいたり、預言者の書に書いてあるとおり、我らが君主の唯一つの教会に集まったことを。すなわち、これこそがローマ帝国⁴³であることを。二つのローマは没落しまし

⁴¹ 『ルカによる福音書』22章15-16節。

⁴² 『マルコによる福音書』14章26節。

⁴³ 写本では、「росское」となっているが、校訂者コーレソフが写本РНБ.Q.XVII.50に拠り修正した。

た。三つ目のローマは立ち、第四のローマは存在しないでありましょう。⁴⁴ 使徒パウロは何度もその書簡でローマのことに言及し、注釈書で「ローマこそが全世界である」と語っております。キリスト教会にかんしては、福者ダビデの次のような言葉が成就しました。すなわち、「これは永遠に私の憩いの地。ここに住むことを私は定める。」⁴⁵

偉大なる神学者⁴⁶によれば以下のとおりです。「太陽を見にまとった女がいる。その足元には月があり、その女の腕には赤子が抱かれている。そこへ、深淵から七つの頭とその頭に七つの王冠をのせた蛇が這い出て、女の赤子を一飲みにしようとする。すると、大きな鷲の羽が女にあたえられて、荒野に逃げる。そのとき蛇は自分の口から川のように水を滴らせ、この川のなかで女が溺れ死ぬようにする。」⁴⁷

不信仰は水と名づけられる。神に選ばれたる者よ、見るがよろしい。すべてのキリスト教帝国が不信心者によって沈められてしまったことを。ただ一人、我らの君主の帝国だけがキリストの恩寵ゆえに立っていることを。ツァーリとして君臨する者は、大いに精進をし、神と向き合って帝国を統治しなくてはならないのであり、金やうつろいやすい富に望みをかけてはなりません。すべてをおあたえになる神にこそ期待を寄せるべきです。

星々は、私が述べてきたように、なんの力も持ちませんし、何をつけ加えもせず、何を取り去ることもありません。なぜなら、使徒のなかで最高位にあるペテロは、公会議書簡において次のように述べているからです。「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。」⁴⁸ 神を愛する者よ、そなたは、主の手のなかにこそ、生きとし生けるものの呼吸が委ねられていることを見るでしょうか。というのは、こう言われているからです。「私は、まもなくもう一度天と地を揺り動かす。」⁴⁹

使徒たちはまだ心の準備ができていなかったもので、主は彼らの力を超えて思考するようには命じませんでした。自らの『黙示録』において、神学に秀でた神に寵愛されるヨハネはこう言われています。「最後のときに救われながら、自らの魂を救いなさい。炎のゲヘナ⁵⁰のなかで二度目の死を死なないように。」救済において全能なる主に、心からの祈り

⁴⁴ 4つの王国についての思想は、『ダニエル書』2章37-40節によるものである。

⁴⁵ 『詩篇』132篇14節。

⁴⁶ 『ヨハネ黙示録』の作者。

⁴⁷ 『ヨハネの黙示録』12章1-4、14-15節。

⁴⁸ 『ペトロの手紙 二』3章8-9節。

⁴⁹ 『ハガイ書』2章6節。

⁵⁰ もともとはエルサレムの城壁の南にある「ヒンノムの谷」を指したが、この場所がかつては幼児犠牲が行われ、のちには町の汚物や動物、罪人の死体が焼却された。このことから、新約聖書では、

をもって向き合おうではありませんか。熱い涙を流しながら、主の御前で泣き叫ぼうではありませんか。主が慈悲をかけてくださいますように。自らの怒りを我々から逸らせてくださいますように。我々を憐れんでくださいますように。我々が心地よい優しい望まれた声で、主が「祝福された人たち、来なさい。そして、天地創造の時からおまえたちのために用意されている国を受け継ぎなさい」⁵¹と言われるのを聞くことができますように。

キリストに拠り立って生き、救われ、健勝であられますように。

2-2. 大公ワシーリイへの書簡。十字の切り方の変更とソドムの淫蕩⁵²について。

より高き全能なる自らのなかにすべてを含む神の右手により、ツァーリたちは君臨し、偉大なる者たちは称えられ、力ある者はそなたの正しさを書くのですが、そのように書く者から、光に満ちあふれた眩しき君主にして大公であり、正しく栄えあるキリスト教の君主であり、あらゆる人々の権威者であり、聖なる神の玉座と、いと清らかなる神の御母、その聖なる栄えある就寝の全宇宙の聖なる使徒教会の響を押さえるお方へ書簡をお送りします。

そのお方は、ローマとコンスタンティノーブルの君主に代わり、輝きに満ちておられます。なぜなら、古いローマの教会はアポナリウス異端の不信仰によって倒れ、第二のローマ、コンスタンティノーブルは、ハガルの末裔が戦斧（せんぶ）と斧とで教会の扉を打ちこわし、いまや第三の新しいローマ、そなたの強力な帝国の聖なる使徒公会の教会が、宇宙のすみずみにいたるまで、正しく栄えあるキリスト教の信仰において、天のしたのあらゆる場所で、太陽よりも眩しく輝いているのです。

敬虔なるツァーリよ、そなたの帝国は、キリスト教信仰の正しく栄えある諸教会が、唯一のそなたの帝国において合流したものにほかならないことをお知りになるがよい。そなたこそが、すべての天のしたに暮らすキリスト教徒たちにとって、ただ一人のツァーリなのです。

ツァーリよ、そなたは神への畏敬をもってこれを守るがよい。そなたにこの地位をあたえた神を畏れるがよい。金にも富にも名誉にも望みをかけてはなりません。こうしたものはすべてここに集まってくるが、この地上に留まるだけです。ツァーリよ、あの正しき方⁵³を思い出すがよい。その方は、錫杖を手にもち、王冠を頭にかぶってこう言われました。

死後悪人が罰せられる場所、すなわち「地獄」の同義語となった。「ゲヘナ」『世界大百科事典』日立デジタル平凡社、1998年。

⁵¹ 『マタイによる福音書』25章34節。

⁵² 「男色」の意。«блудь содомский» // Словарь древнерусского языка XI-XVII вв.

⁵³ ダビデを指す。

「集まってくる富に心を奪われてはならない。」賢者ソロモンはこう言われました。「富と金は宝物蔵に入ることはなく、それを必要としている人間を助けることになろう。」⁵⁴ 使徒パウロは彼らに倣ってこう言われています。「あらゆる悪の根源は、金銭欲である」と。⁵⁵ パウロは持つなとおっしゃったわけではありません。富に望みをかけてはならない、すべてをおあたえになる神に望みをかけなさいと言っているのです。なぜなら、そなたの神への清らかなる信仰と愛は、聖なる神の教会にたいするものだからです。であるからには、ツァーリよ、二つの戒めを守らなくてはなりません。

あなたの支配なさる帝国のなかでは、人々は正しく十字を切っておりません。正しい十字の切り方については、ずっと昔にすべてに正しい知識をもっていた使徒パウロが次のように言っています。「何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。」⁵⁶

第二に、聖なる教会の聖堂を主教たちでいっぱいにしてください。そなたが統治する世では、聖なる神の教会が夫を亡くした女のようにならないようにしてください。ツァーリよ、あなたの先祖、コンスタンティヌス大帝、聖なる福者ウラジーミル、神より選ばれた偉大なるヤロスラフ、そなたと同じ根をもつそのほかの聖なる福者たちが定めた戒めを破ってはなりません。ツァーリよ、聖なる神の教会と栄えある修道院を侮辱してはなりません。それは、そのあとに来る世代の者たちが記憶するために、永遠の幸せを継承するものとして神に捧げられたものだからです。偉大なる第 5 回全地公会⁵⁷ はこれをきわめて厳しく禁じております。

第三の戒めについて書きますが、これについては激しく泣き叫びながら、そなたは自らの栄えある正教の帝国において、この毒麦を根絶やしにするように要請します。これが許されぬ罪であることは、ソドムの広場で燃えさかる火の硫黄の焰が今にいたるまで証明しております。このことを予言者イザヤは次のように言っています。「ソドムの支配者たちよ、主の言葉を聞け。ゴモラの民よ、我らの神の教えに耳を傾けよ。『おまえたちの捧げる生贄や捧げ物の脂肪が私にとってなんであろう。私は焼き尽くされた捧げ物に飽いた。もしもおまえたちが私に香を持ってきたとして、それは私の忌み嫌うもの。私の魂は、おまえたちの祭日を憎む。』」⁵⁸

さあ、敬虔なるツァーリよ、聞くがよい。すでに滅びて死んだソドム人にではなく、生きて悪事をなす人間たちにこのようなことを言っています。「妻を裏切る者は自らの肉体

⁵⁴ 『箴言』28章8節参照。

⁵⁵ 『テモテへの手紙 一』6章10節。

⁵⁶ 『フィリピの信徒への手紙』3章18節。

⁵⁷ 第二コンスタンティノポリス公会議（553年）を指すのであろうか。

⁵⁸ 『イザヤ書』1章10-14章。

を引き裂く者である。ソドムの淫蕩をなす者は、自らの子宮の種を殺す。」神は人間を創造されました。子供が生まれてくるためにその胎内には種があります。我らは自分でこの種を殺し、悪魔の供犠に差し出しているのです。このような忌むべきことが世俗の者たちばかりではなく、私があるために祈りを捧げるほかの者たちのなかにも蔓延しているのです。これを読む者は、それがわかるでありましょう。ああなんということでしょう。慈悲深いあのお方は長いあいだ我々を裁こうとせず、忍耐しておられました。そして、涙に暮れ泣き叫びながら、私はそれを書いてしまった。私自身が呪われ、罪にまみれた者であるが、黙っているのが怖くなったのです。あのタラントンを隠した奴隷のように。⁵⁹

なぜなら、私は罪深く、あらゆることにおいて手際が悪く、知識においても無知ですが、言葉がしゃべれなかったバラムのロバが知恵のある言葉をしゃべったように、家畜が預言者を教え導いた⁶⁰ ように、敬虔なるツァーリよ、あつかましくも私が陛下に書簡を送ったことを咎めだてしないでください。いま陛下にお願いし、ふたたび懇願申し上げます。私が以上に書いたことを、主のためにお聞き入れください。なぜなら、あらゆるキリスト教の帝国は、そなたの帝国のなかに集まり集い、こののち、我らは帝国が終わりなく続くことを待ち望んでいるからです。

愛しながら、呼びかけながら、神の恩寵によって祈りながら、私はそなたに書簡を書きました。ですから、不足を豊穡に、無慈悲を憐れみに替えてください。昼となく夜となく泣き叫ぶ者たちを慰めてください。侮辱する者たちの手から侮辱される者を救いだしてください。主は次のように言われているからです。「私を信じる、これらの小さな者を一人も軽んじないように気をつけなさい。なぜなら、かれらの天使たちは天でいつも私の父の御顔を仰いでいるからである。」⁶¹ 「いかに幸いなことでしょう。乞食や貧しき者に思いやりのある人は。災いのふりかかるとき、主はその人を逃れさせてくださいます。」⁶² 主はその人を守り、その人を活かし、その人を地上で幸福にし、その人を敵の手にはわたしません。主はそなたを助けに来てくださいます。

自らの帝国を首尾よく統治することができれば、そなたは光の息子となり、いと高きエルサレムの住人となるでしょう。それは、以上において私がそなたに書いてきたことであり、いままた申し上げるとおりです。敬虔なるツァーリよ、守りを堅め、耳を傾けなさい。すべてのキリスト教帝国はそなたの帝国のなかでひとつに合流しました。二つのローマは斃れ、第三のローマは立ち、第四のローマは存在しません。偉大なる神学者の言葉とおおり、そなたのキリスト教帝国は別の帝国に取って代わられることはありません。キリスト教帝

⁵⁹ 『マタイによる福音書』25章14-30節。

⁶⁰ 『民数記』22章22-35節。

⁶¹ 『マタイによる福音書』18章10節参照。

⁶² 『詩篇』41篇2節。

国にたいしては、めでたきダビデの言葉が実現したのです。「これは永遠に私の憩いの地。ここに住むことを私は定める。」⁶³ 聖ヒッポリュトス⁶⁴ は言いました。「我らが、ローマがペルシアの軍勢に包囲され、ペルシア人たちがスキタイ人とともに我らにたいして戦いを挑むのを見たとき、我らはそれがアンチキリストであることを理解するだろう。」

神が、いと清らかなる神の御母と聖なる奇跡成就者たちとすべての聖者たちの祈りによって、そなたに平安と、愛と、長寿と健康を賜りますように。そなたの強力なる帝国が成就しますように。

⁶³ 『詩篇』132章14節。

⁶⁴ エイレナイオスに学び、ローマで活躍した教父、護教家。170年ころ生、235年没。「ヒッポリュトス」『世界大百科事典』日立デジタル平凡社、1998年。